

## 李鴻章襲撃事件と佐藤進

明治27年(1894年)に起きた日清戦争は、近代国家としての歩みを始めた日本にとって、初めての外国との戦争であった。

その日清戦争の直接的なきっかけは、朝鮮国内で起きた東学党の乱であり、乱収拾後の朝鮮の支配権をめぐる日清両国間で争いが生じて戦争へと発展した。日本が戦いを優勢に進める中、翌年の明治28年3月下旬、講和条約を締結するために清国全権大臣として李鴻章が来日し、下関で講和会議が開かれた。

清国側は講和談判の前に休戦を求めたが、日本側は容易には応ぜず、交渉は難航。その最中の3月24日、李が会議場の「春帆楼」から宿舍の「引接寺」へ帰る途上で、暴漢小山豊太郎に銃撃される事件が勃発した。犯人の小山は即座に捕らえられたが、弾丸が命中した李の身に万一のことがあれば正に日本国の信用に関わる国家の一大事である。政府首脳は、この局面の打開策として直ちに休戦条約の道を選んだが、その一方、この国難に際し、明治天皇は陸軍軍医総監佐藤進医学博士を下関に派遣した。

佐藤の懸命の治療によって李は快癒し、日清講和条約は無事締結される運びとなった。

3週間を超える李の闘病生活の中で李と佐藤はお互いに確固たる信頼関係を築き上げ、活人剣の話もこの中から生まれた。

佐藤の国家への貢献度は、当時として計り知れないものがあったと言っても過言でない。佐藤は、李の治療に当たった様子を自ら綴った「李中堂治創記」を陛下に捧呈している。

### 『李中堂治創記』より

『・・・古宇田軍醫正より外務大臣並に地方裁判所へ差出したる診断書は左の如し。

3月24日午後4時30分、赤間關市外濱町に於て、歸館の際、狂漢の爲め面部に銃創を受く。依て同6時參館之を施療す。主任醫下ノ關要塞病院長古宇田信近、助手の中川二等軍醫、町田三等軍醫、古川三等軍醫等にして、其の他李中堂侍醫林聯輝、佛醫ズパス立會す。創部は左眼窩縁中央の下方一仙迷の所に射入口あり、創縁皮膚稍焚燒褐變創口は鋸齒状となり、橢圓形をなし左眼は殆と腫閉して僅に眼球を見す。消息子を以て創内を検するに、上顎骨に一仙迷の創口を生じ、深さ四仙迷にして稍下方に走れり。體溫脈搏異状なし。又腦症を認ず。創所は嚴に防腐療法を施せり。・・・

27日

・・・診察後中堂佐藤軍醫總監と談話す。曰く、余を射撃せしものは余が生命の敵なり。貴官は余が生命の恩人なり。又曰く、余が創傷幸にして快癒し、歸國するを得ば、我清國皇帝に奏上して貴官に勳章を請ひ奏るべしと。・・・

28日

・・・總監中堂を診察せし後は引留められて雑談すること多し。一日中堂總監の服を撫して曰く、是れ軍人の服なりや。答へて曰く、然り。官等は如何。答へて曰將官の服なり。中堂微笑して問うて曰く、總監戦ふことを知るかと。乃ち答へて曰く、余は戦ふことを學ばず、余が手にする所の刀は是れ殺人刀にあらずして活人刀なりと。中堂妙と稱す。・・・

6日

・・・午後5時佐藤軍醫總監、往診。今朝來異状なし。診察後李經芳は總監に對して曰く嚴父が創傷は日を追つて快癒に赴く。是れ全く閣下の治術宜しきを得たるに由る。余等實に歎喜に堪へず。閣下の芳名は既に貴邦に遍く婦女子と雖も皆之を知る。然れども弊邦に於ては未だ然らず。余等歸國の後には普く貴名を弊邦人に知らしめ、以て高恩百分の一に

だも報ずるを志とせんと。・・・

12日

・・・診察後、佐藤軍醫總監は東京某新聞に記載せし活人刀と題する左記の七律を中堂に示す。李伯朗吟して佳作なりと稱す。

### 活人刀

豈要軍中講六韜	青囊一個建勲勞
才如方朔奇言湧	術似華陀令譽高
世上皆推醫國手	腰間常佩活人刀
蓬萊自有長生藥	不向瑤池偷碧桃

中堂又總監に語つて曰く余も思ふ所を賦して閣下に贈らんと。且つ曰く、此詩意は啻に再生の恩を閣下に謝するのみならず、余が貴邦に來りて兩國の爲に勞するの苦衷をも窺ふべきを以て、冀はくは廣く貴邦人に余が意の存する所を知らしむるを得んと。

13日

・・・診察後中堂は總監に約する所の七律一首を贈らる。

### 贈日本總醫監佐藤

耄年秉節赴東瀛	願化干戈見太平
盟約重申同富弼	伏戎一擊鄙荊卿
奇才醫國君無敵	妙手回春我更生
待乞寶星邀上賞	綠草歸去達通明

合肥 李鴻章

17日

午前9時、佐藤軍醫總監中堂を訪ふ。曾て撮影せしめし中堂の寫眞三枚に總監の寫眞及び略傳一冊を添へて之を贈る。李氏父子の喜び極まりなし。中堂の寫眞は頗る鮮明にして、而かも其容貌は平常の如くにして病後の人と見えず。面部の創痕は小にして、殆んど認め難し。中堂は自ら筆を執り、寫眞の裏に下の如く認めて總監に與へられたり。

此次受鎗傷賴醫治全癒甚感謝之

贈軍醫總監佐藤進閣下

光緒21年3月

文華殿大學士太子太傅伯爵李鴻章

此日中堂及び其一行は午後3時解纜、歸國の程に上る豫定なるを以て、總監は李氏父子及び侍醫等に別を告げたり。中堂一行の乗船は午後2時馬關を解纜す。』

この出来事を通して培われた佐藤と李の親交・友情は、終生変わることなく続いた。李は帰国後、律詩に讀んだ通り清国皇帝に上奏して「双龍寶星勲章二等」を佐藤に贈った。

李が佐藤からの要請を受けて認めた最晩年の書が写真の二書である。  
 「妙手回春」の書は、現在も順天堂大学に大切に保管されている。



李鴻章の書